【追悼文】

耳鼻咽喉科領域の適応を拓いたパイオニア
（柳田則之先生を偲んで）

医療法人珪山会　鵜飼病院院長　高橋　英世

略　歴

昭和8年9月9日生	
昭和33年3月	名古屋大学医学部卒業
昭和34年4月	名古屋大学大学院医学研究科（耳鼻咽喉科）入学
昭和38年3月	同上　修了
昭和39年7月	名古屋大学医学部耳鼻咽喉科助手
昭和41年2月	医学博士号学位授与
昭和44年10月	附属病院耳鼻咽喉科助手
昭和48年8月	名古屋大学耳鼻咽喉科講師
昭和53年9月	ドイツ留学（54年6月まで）
昭和57年8月	名古屋大学医学部耳鼻咽喉科教授
平成9年3月	同上停年退官
平成9年4月	名古屋大学名誉教授
平成21年8月3日	他界（享年75歳）

本稿の寄稿が大幅に遅れた理由，訃報に接するのが遅かったからです。旧年末近く届いた喪中年始欠礼通知葉書のなかに，驚愕の一通がありました。文面には，柳田先生は，既に8月に他界なさっていたとあり，驚きの余り声を失いました。その後，頂戴した奥様からの詳細なお便りでは，昨年5月に体調を崩され，約2ヶ月の闘病の末，8月5日にお亡くなりになったことを知りました。地元でありながら，己の不明を深く恥じ入ったものです。

柳田先生は，筆者にとり兄のような存在でした。とくに高気圧酸素治療（HBO）の分野では同志ともいうべき仲で結ばれていました。先生は，突発性難聴（突難）の治療にHBOを導入された先達として有名です。そのことをご本人に申し上げると「あれは先代（三宅　弘教授，故人）の業績で，私の専門は圧力外傷（barotrauma）です」と笑って訂正されました。先生のお仕事が，はじめて日本高気圧環境医学会雑誌に発表されたのは1972年刊行の第7巻誌上，15例の突難症例に対する治療成績を報じ，わが国におけるこの方面への適応拡大の嚆矢となられたのです。しかし後には，突難に対する臨床活動の傍ら，徐々に圧力外傷に研究の方向を転じられました。かつて名大病院高気圧治療部に備えられていた動物実験用低圧チャンバーを用い，低圧環境に曝露した小動物を，瞬時に大気圧環境に戻すことにより内耳の蝸牛微細構造に生ずる損傷を電顕的手法で追求しておられました。

しかし私達にはやはり，突難治療の一選択肢としてHBOの可能性を開拓された柳田先生のご努力は決して忘れることは出来ません。1998年，スイスのKarger社から上梓された英文の著書“Hyperbaric Oxygen Therapy in Otorhinolaryngology”のなかで，先生は，実に1614例の突難症例に対する臨床成績を総括されています。まさにこの分野における一大集大成と申せましょう。

格別の趣味をお持ちでなかった先生は，文字通り仕事一筋の人生，耳鼻科診療を続けることが生き甲斐だったとは，奥様のお便りに在った言葉です。長寿時代の今日，七十代半ばでのご他界は余りにも早過ぎます。これからご自身の人生を楽しめる筈だったからです。心からご冥福をお祈りし，オマージュを捧げます。

合掌

参考文献：

1）三宅弘，柳田則之，丹羽英人ほか：突発性難聴に対する高気圧酸素治療．日本高気圧環境医学会雑誌　1972；7：6-7.
2）Nakashima T, Fukuta S, Yanagita N：Hyperbaric Oxygen Therapy for Sudden Deafness. In：Yanagita N, Nakashima T, eds. Hyperbaric Oxygen Therapy in Otorhinolaryngology, Basel；Karger. 1998：pp.100–109.